

# 「日本3.0」

Vol.35

「経済×文化」の時代が  
やってくる

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

令和の時代は、世界でどんな産業が栄えるのでしょうか？  
産業の変遷を振り返ると、90年代から2000年代前半の世界を席巻したのは、金融でした。  
金融工学の発展により「金融（経済）×テクノロジー」にまつわるイノベーションが生まれ、ウォール街が活況を呈しました。サブプライムローンバブルの崩壊によるリーマンショックまでその栄華は続きます。  
金融の次に一世を風靡したのは、テクノロジー産業です。21世紀に入

り、グーグル（1998年創業）やアマゾン（1994年創業）の存在感が拡大。2004年にはフェイスブックも誕生しました。2007年にはアップルが初代iPhoneを発売し、モバイル時代が幕を開けました。

今なお、グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾンからなるGAFAを中心とするテック企業の天下は続いています。ただし、データ寡占への反発、中国のBAT（バイドゥ、アリババ、テンセント）による逆襲などもあり、GAFAの勢いもピークを越えた感があります。

今はテクノロジーの影響が高まりすぎて、利便性は高まった一方、「テクノロジー疲れ」もが深刻化しています。

では、金融、テクノロジーの後に来るのは何でしょうか？

「それは文化だ」というのが私の読みです。テクノロジーはあくまで手段であり、能力増幅器のようなもの。金融もあくまで手段であり、血液のようなもの。テクノロジーも金融も強力なネタ素材があつてこそ、威力

が発揮されるのです。テクノロジー、金融に対する失望のあと、今後一層重要視されるのが、文化でしょう。文化、アート、人文科学の逆襲はすでに始まりつつあります。

平成の30年間は、日本経済にとつて喪失の日々でした。目の前の生活がほどほどに豊かなので気づきにくいですが、日本はボロ負けしたと言つていいでしょう。

平成を席捲した金融革命、インターネット革命、メディア革命、そのすべてにおいて出遅れました。さらに現在進行中のAI革命でも、米中を筆頭に世界の後塵を拝しています。

しかし、あきらめるには早すぎます。より文化が重宝される時代、歴史と文化と自然に恵まれた日本には、大きなアドバンテージがあります。ただし、文化を文化として敬うだけではその価値を広げることができません。

「経済×文化」をかけあわせて、多彩な価値を生み出す編集思考の達人を一人でも多く増やすこと。それが日本再興のカギとなるはずですよ。



## Profile

NewsPicks 取締役 新規事業担当

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得（国際政治経済専攻）。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。2014年7月からソーシャル経済メディア「NewsPicks」の編集長を務めた。2018年4月より現職。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」「日本3.0」がある